読み聞かせで子どもたちの心を癒したい！

大船渡の吉浜小学校で絵本の読み聞かせ。児童、園児ら100人が集まった

被災地を巡回して感じたこと

たくましい被災者の姿に感動

志茂田 景樹（作家）

1999年、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、これまで1500回以上も全国で読み聞かせを行ってきた作家・志茂田景樹氏。そこには、昨年3月11日以降、被災地となった地域も数多く含まれる。震災以後も志茂田氏は、栃木県内に設置された避難所や岩手県沿岸部などを精力的に訪れ、慰問活動を行っている。作家として、また励ます手として、そこで何を感じ、何ができたのか。この2月上旬にも宮城・気仙沼市を訪れるという同氏に、その思いを寄稿してもらった。（編集部）

未曾有の被災をもたらした3・11震災からまもなく1カ月が経つ。被災地は復興の槌音を高らかにひびかせているところもあれば、まだ瓦礫の山を残し復興の本格工事にも手をつけられない状態から脱し切れないでいるところもある。

僕は1999年8月、「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、以来その仲間と共に全国各地を訪れ、読み聞かせ活動を行ってきた。昨年12月にその回数は1500回を超えたが、そのうちの10数カ所は3・11の直接の被災地である。その被災地を慰問し、以前訪れたときの街並みが見渡す限りの瓦礫の原に一変したことに言葉を失った。それでも、それを現実として受け入れたうえで立ち直ろうとする被災者のたくましさに触れ、感動もした。

そうして慰問を積み重ねてきて、その未来は過去から学び、現在を克服することで、その土地の再生に繋がるのではないかと思うようになった。

原発避難児

「僕の体、どうなるの？」

未来への不安、恐怖訴える

隊」は3・11の翌月から避難所、被災地慰問を開始している。当時、栃木県内には福島から避難者が避難生活を送る18カ所を巡回している。18カ所へ避難した人のほとんどは福島・浜通り地域からの避難者、つまり原発事故による避難者である。

「よい子に読み聞かせ隊」は、栃木・小山市「県南体育館」に置かれた避難所から読み聞かせ慰問をスタートさせた。なぜ被災地ではなく避難所から始めたかというと、実は、原発事故で避難を余儀なくされた市町村のいくつかが読み聞かせ、講演に招かれていたからである。一例を挙げれば、原発立地の双葉町は3・11前年の2010年11月27日、「子ども読書フォーラム」の基調講演を行っている。

フォーラムの主宰責任者である双葉南小学校・末永弘祐校長に車で送って貰ったあと、僕は、福島第1原発の敷地内の遠景通ってみた。広大な敷地の彼方に未来都市のように並び立つ建屋群にいさかの畏れを抱いた。

県南体育館では小山市の大久保寿夫市長も講演に関わり、老若男女の避難者多数が明るい雰囲気で大型絵本、紙芝居、ミニコンサートを楽しんでくれた。このとき、「よい子に読み聞かせ隊」は3人編成で、バイオリンとフルート、チェロの各奏者、紙芝居演者の4人。当時、栃木県内には福島から避難者が避難生活を送る18カ所を巡回していた。そのうちの3カ所を3日、4日の2泊2日で回っている。18カ所へ避難した人のほとんどは福島・浜通り地域からの避難者、つまり原発事故による避難者である。

「よい子に読み聞かせ隊」は、栃木・小山市「県南体育館」に置かれた避難所から読み聞かせ慰問をスタートさせた。なぜ被災地ではなく避難所から始めたかというと、実は、原発事故で避難を余儀なくされた市町村のいくつかが読み聞かせ、講演に招かれていたからである。一例を挙げれば、原発立地の双葉町は3・11前年の2010年11月27日、「子ども読書フォーラム」の基調講演を行っている。

フォーラムの主宰責任者である双葉南小学校・末永弘祐校長に車で送って貰ったあと、僕は、福島第1原発の敷地内の遠景通ってみた。広大な敷地の彼方に未来都市のように並び立つ建屋群にいさかの畏れを抱いた。

県南体育館では小山市の大久保寿夫市長も講演に関わり、老若男女の避難者多数が明るい雰囲気で大型絵本、紙芝居、ミニコンサートを楽しんでくれた。このとき、「よい子に読み聞かせ隊」は3人編成で、バイオリン、フ